

セッションD「寄せ場の思想・再考——船本洲治・釜共闘・現闘委」

報告：原口剛（神戸大学）「寄せ場の思想と闘争の原点——共同作業のための「地図化」の試み」、友常勉（東京外国語大学）「感染と共振 寄せ場の闘争と東アジア反日武装戦線」

コメント：栗原康（武蔵野学院 大学非常勤講師）

① 原口剛（神戸大学）「寄せ場の思想と闘争の原点——共同作業のための「地図化」の試み」

原口報告は、まず、現在、大阪・釜ヶ崎で進捗しつつあるジェントリフィケーション下の寄せ場と記憶の危機を参照し、現在の「社会の総寄せ場化」は、どのような空間の様態をとることになるのかを考えるために、そもそも「寄せ場」とは、いかなる空間性を指し示す概念であったのかを確認する作業として、今回の報告があると位置づけた。そして本報告の構成として以下の2点を示した。1)「寄せ場」概念が形成される過程を検証し、その成立条件を提示・拠点性：国家・自治体による「上からの」空間編成に対する、「下からの」場所形成・流動性：山谷—釜ヶ崎—寿町—笹島がたがいに共振するような地下的・横断的な空間性。2) 上記のように「寄せ場」概念を構成する空間性を「地図化」したうえで、1970年代初頭の釜共闘・現闘委による闘争が有する特異性を確認し、また、船本思想の現代的意義を仮説的に提示すること。

こうした論点は運動史の以下のような整理によって明らかにされる。すなわち、流動的下層者による運動の転換点が、第1期：1960年代後半～1970年代初頭⇒ 山谷／釜ヶ崎と第2期：1970年代半ば～1980年代初頭⇒ 寿町／笹島に区分される。

この区分は、釜ヶ崎においては、1970年12月：第1回越冬闘争から1975～78年：公共空間をめぐる攻防、によって定義される。原口報告は、これに対応する運動形成を、山谷、寿町（自主管理闘争から労働運動へ）、笹島（野宿者支援から労働運動へ）の各寄せ場において時系列的に事件史・運動史を提示した。

上記のような実証的な運動史の区分と個々の寄せ場の性格づけを踏まえて、原口報告は、「寄せ場」概念の形成を、<第1期>「釜ヶ崎＝寄せ場」、「山谷＝寄せ場」：それぞれのドヤ街全体を指し示す概念として形成（「山谷—釜ヶ崎」という表記の登場、その概念拡張の模索）として、そして<第2期>寄せ場＝釜ヶ崎・山谷・寿町・笹島（四大寄せ場）の構成として把握した。

こうした寄せ場の形成は同時に次のような横断的で空間的な相互作用にもとづいていた。すなわち、「下層労働者の流動性とその空間性」は、1960年代、共振する山谷・釜ヶ崎暴動によって、そして下層労働者の流動する身体が生み出す地下的・横断的な空間性によって。しかもそこでは「伝染する思想と実践」が現われた。すなわち、山谷—釜ヶ崎の共振関係、暴動を介した伝染：山谷→寿町、映像を介した伝染：寿町→笹島、そして、これらを媒介する流動的下層労働者の空間性の形成である。

こうした思想・運動状況において、船本洲治は何をもたらしただろうか。そもそも船本は「流転の経験」から出発している（1968年：広島学生会館に寄宿していた三名とともに山谷へ、1972年：活動拠点を釜ヶ崎に移す、1973年～：潜行しつつ全国を歩く、1975年：沖縄嘉手納基地ゲート前において皇太子訪沖反対を叫びつつ焼身決起）。それは空間思想としての「流動的下層労働者」論である。その特質は下層労働者が有する地下的・横断的な空間性に根差しつつ、それが有する遠心力を現勢化することであり、「個別実体に肉薄して獲得された具体性をもって、概念に新たな豊かな内実を付与し、全体世界を内から再構成していくこと」であった。そしてここに東アジア反日武装戦線との結合点がある。また、船本には、言葉の発明①（「やられたらやりかえせ」暴動をはじめとする下層労働者の集合的エネルギーを直接行動へと転化）、言葉の発明②（「黙って野たれ死ぬな」のように「廃棄された生」の闘争の領域を形成すること）がある。

このように寄せ場の運動・思想史と船本洲治の意味を再把握し、原口報告は最後に「船本思想を現代空間論の理論的課題へといかに接続しうるか——いくつかの暫定的な方向性」にかかわる論点を最後に指摘した。

② 友常勉（東京外国語大学）「感染と共振 寄せ場の闘争と東アジア反日武装戦線」

友常報告の目的は運動史・思想史のなかに東アジア反日武装戦線を位置づけることであるが、とりわけ東アジア反日武装戦線の実践を、その重大な思想資源であった寄せ場の闘争を参照することで、「感染」と「共振」という観点から、東アジア反日武装戦線を考察する視点を提示してみることで、それによって社会思想と社会運動とが共振・感染のレベルで相互影響関係にあることを示すことにある。

寄せ場の思想・運動と東アジア反日武装戦線との関係を考察する手がかりは、1974年3月1日発行『腹腹時

計 都市ゲリラ兵士の読本 vol.1』(東アジア反日武装戦線“狼”兵士読本編纂委員会)が用いた「流民」「流動的労働者」「流動的下層労働者」という一連の語彙群である。『腹腹時計 Vol.1』には「訂正」箇所があり、それは序文にあたる「はじめに」の中で七項目からなる綱領的な部分のうちの「4」である。その「4」とは、「日帝本国に於いて唯一根源的に闘っているのは、流民=日雇労働者である」とある。『腹腹時計 都市ゲリラ兵士の読本 vol.1』は初校ゲラの「流民」を(おそらく)印刷製本の直前に「流動的労働者」に置き換えている。この「訂正」に従えば、正しくは「流動的労働者=日雇労働者」と表記されることになる。この変更が何を意味しているのかが論点となる。

東アジア反日武装戦線はまず“狼”、続いて“大地の牙”が活動を開始し、少し遅れて“さそり”が合流した。“さそり”のメンバーとなる黒川正芳と“狼”の大道寺将司とが意識的に会うようになったのが1974年7月頃と考えられている。“狼”のメンバーと“さそり”のメンバーが高田馬場から日雇仕事に行き、それで知り合ったのが発端、とされている。こうした背景を踏まえたとき、「流民」から「流動的労働者」への「訂正」について、ただちに連想されるのは寄せ場の闘いであり、とりわけ船本洲治の影響であるが、しかし結論からいえば直接的な関係はこの時点では想定できない。つまり、1974年3月発行の『腹腹時計 vol.1』における「流民」の「流動的労働者」への「訂正」という論点にかかわっていえば、この「訂正」が挿入されたであろう1974年2月の時点では、“さそり”グループおよび船本洲治と“狼”との直接的な接触はなかったことが推定される。従って、「流民」の訂正は、あくまで“狼”グループ内部での固有の事情にもとづくものであったことが想定される。

むしろ、直接的な参照関係を欠いたところで生まれた共振・感染の関係が、「流民」「流動的下層労働者」という語彙の流通に示されている。船本洲治は1972年5月13日付『裸族の旗』の「下層人民に依拠し、徹底した武装闘争を展開せよ!」において「流動的下層労働者」に具体的な定義を与えた。船本自身の経験から帰納された「トビ職的結合」と、それを手がかりとしたこの「流動性」をもって、すなわち船本は自身の身体固有性から「流動的下層労働者」を定義するための手がかりを得た。そしてそれを原点にした組織論と運動論にもとづいて、「叛乱が叛乱をオルグする」「現場闘争と暴動」を主要な闘争として提起した。1972年5月13日付「プロレタリアートの武器の政治を構築せよ」では、この「流動的下層労働者」が商品の流過程に根拠を持ち、その根拠があるからこそ暴動や抵抗、現場闘争が必然的であることを説いている。

船本の流動的下層労働者を流通論に重ねると、「流通の分析は階級闘争の理論を革命的主体の理論へと発展させる」というネグリの言葉との呼応関係も示される。世界を自己の市場として獲得しようとする資本は、逆説的に流通の空間を拡大しなければならない矛盾を抱えており、ある場所から他の場所への移動という流通に要する時間を最大限縮減しようとする。賃金の支払いもまた、生産過程に随伴する資本と労働力のあいだの流過程である。それゆえ資本はこの流通が必然的にもなうコスト=障害を除去しようとする。それが非正規労働や重層的な下請け化によるピンハネや労働法違反として現れる。だがこの流通性が流動性として現れるとき、それは労働者の相対的な自立性を保障する。そこに資本の価値増殖に対抗する労働者の「自己価値創造」の条件がある。こうして、資本の価値増殖過程が同時に労働者主体の叛乱の過程でもあるような、直接的な二重性こそが、船本の「流動的下層労働者」という概念が有している重大な意義であることがわかる。東アジア反日武装戦線との関係からいえば、こうした流過程に根拠をおいた労働者の「自己価値創造」の運動については、共有されずに終わっている。とはいえ、『腹腹時計 vol.1』の序文の訂正と、訂正後の文章「日帝本国に於いて唯一根源的に闘っているのは、流民流動的労働者=日雇労働者である」という文言は、寄せ場の闘争に対する慎重な言葉の選択を示しており、それによって、東アジア反日武装戦線への未来の“さそり”グループの志願をうながし、対等な信頼関係をつくりあげるための重要な布石となったことが想定されるのである。

なお、二つの報告とも、山谷現闘委のメンバーであった中山幸雄氏の資料を用いて、当時のアジビラを豊富に参照・提示しつつおこなわれたことを付け加えておきたい。しかも、「中山資料」の整理と分析は始まったばかりであり、共同研究者の参加を募っていることもアナウンスされた。さらに、コメンテーターの栗原氏によって、1970年代に焦点を置いたこれらの研究の意味が、現在の「社会全体の総寄せ場化」状況へと翻訳されることで、よりアクチュアルで活発な討論がおこなわれたことも、付け加えておきたい。(文責・友常勉)